

# 戦間期におけるマルクス主義者の ファシズム論

深澤民司

## 目次

1. はじめに
2. コミンテルンの創設とその理念
3. コミンテルン指導部のファシズム論
4. コミンテルン指導部以外のマルクス主義者のファシズム論
5. おわりに

## 1. はじめに

2021年1月6日、前年のアメリカ大統領選挙の敗北を認めないドナルド・トランプの支持者は、勝利したジョー・バイデンの大統領就任を認定しようとしたアメリカ連邦議会議事堂を襲撃し、それを占拠した。アメリカ史上初の暴挙である。これをめぐり「水晶の夜」や「ミュンヘン一揆」になぞらえる論評も出ている。第二次世界大戦が終わって76年経っても、自由民主主義体制を脅かす言動や、排外主義的・差別主義的な運動が出てくると、ファシズムやそれに関連した言葉が現れ出る。ファシズムに関する書物も頻繁にはと言わないまでも、コンスタントに出版されている。ファシズムが誕生してからおよそ100年の間に蓄積された研究は膨大な量になる。それでもファシズムとは何かの議論は終わってはいない。それゆえに、今日、ファシズムとは何かを論じるためには、研究史を整理することが不

可欠である。

これまでのファシズム研究について、その発生因の所在のという観点から分類すると、まずは行為主体と構造に分けることができる。行為主体についてはさらに、行為の動因という観点から思想と心理に分けることができる。思想にしても心理にしても主体外部からの影響を多分に受けるが、それ自体の内在的源をもつゆえに独立した要因とみなすことができる。また、思想にはもっとも抽象的な理論から心理と似たような感情まで含まれ、感情のレベルなら心理とほとんど同一である。それらはアプローチの違いによって区別される。構造については、カール・マルクスが論じた上部構造と下部構造の区分を用いることにする。前者は政治や文化などの制度や意識形態であり、後者は経済的なものである。もっとも、マルクス主義者が言うように上部構造が下部構造によって完全に規定されるとは考えていない。起源を辿っていけば、マックス・ウェーバーが言うように、政治にしても宗教にしてもそれ自体の内在的源をもつ場合が多い。すべての研究がこれら4つのカテゴリーのどれかに完全に収まるものではないが、ここではファシズム現象を説明するうえで、発生因として何をもっとも重視しているかを基準にして分類する。

ファシズム研究の歴史は古く、ファシズムが台頭してすぐに始まっている。第二次世界大戦が終わり、イタリアやドイツのファシズム体制が崩壊する頃には、すべてのカテゴリーで多くの研究が蓄積されるようになっていた。戦後から今日までの研究は時代によって力点が置かれるところは異なるものの、ほとんどの研究領域で多大な進展があった。数の多さからすべてを論じることはきわめて困難である。そこで本稿では、終戦時までの研究に限定するとともに、下部構造に区分けされるマルクス主義者、とくに共産主義者の研究に絞って考察したい。下部構造に照準した研究はマルクス主義者以外も行っているが、それについては別の機会に論じることにする。なお、用語についてであるが、本稿では、マルクス主義とはマルク

スとフリードリヒ・エンゲルスによって確立された理論に依拠する思想、共産主義とはロシア革命以降のボルシェヴィズムの系譜をひくマルクス主義のこととする。

ファシズムが台頭して以降、それを単なるイタリアに起こった政治運動ではなく、世界史的観点から捉え、総称的な意味付与を最初にしたのは共産主義者だった。コミンテルンの結成以降、共産主義はコミンテルンを中心に動いていくことになる。そこで、共産主義者のファシズム論を理解するために、コミンテルンの指導部の主張から見ていかねばならないが、それを理解するためには彼らのおかれた当時の立場や基礎となる理念も念頭に置いておく必要がある。まずはこの点から論じることにする。

## 2. コミンテルンの創設とその理念

1917年3月にロシアで労働者が蜂起して革命（ユリウス暦・二月革命）が起り、皇帝ニコライ2世は退位して自由主義的な臨時政府が設立された。4月にレーニンが帰国して「四月テーゼ」を発表し、戦争をやめ臨時政府からソヴィエトに全権力を移すことを主張した。弱体化していたボルシェヴィキはこれを受け入れ、それからはレーニンがそれを率いることになる。急速に力をつけたボルシェヴィキは10月になってレーニンの提起に従い、武装蜂起により臨時政府から権力を奪取し、ソヴィエトが全権力を掌握することを決定する。そして11月6日に革命行動が始まって臨時政府は打倒され、ボルシェヴィキはレーニンを議長とする新しい政府「人民委員会議」の設置を宣言した（ユリウス暦・十月革命）。レーニンは当初、ロシアのような農民の多い後進地域ではまずは民主主義革命が必要であり、その後社会主義革命を起こすという二段階革命論を唱えていた。しかし、二月革命が起こるとすぐにトロツキーの主張を受け入れ、社会主義革命の即時決行を訴えるようになっていた。この基本的方針のもと、プロレタリ

アートによる即時の権力奪取とその革命の世界全体への止むことなき拡大という「永続革命論」、ならびに先進地域も含む世界全体で革命を展開すべきという「世界革命論」を唱えた。

その頃のレーニンを始めとする革命指導者たちは、世界革命が起これなければロシアのような後進地域では社会主義革命は維持できず、ボルシェヴィキ政府は崩壊すると考え、先進諸国、とくにドイツに革命が起きることを期待していた。そしてこうした動きを推し進めるために、ロシア革命の指導部は第三インターナショナルの設立をめざした。トロツキーの起草により、1919年1月24日付の招請状が39の党や団体に送られた<sup>(1)</sup>。そこには左翼の最大勢力になる集団の礎が表れている。重要なポイントは、第1に、「共産主義インターナショナル第1回大会への招請状」と題されていることだ。共産主義インターナショナル（コミンテルン）の始まりであり、このときからボリシェヴィキは共産党を名のようになる。そこには第二インターナショナルと完全に袂を分かち、独自の組織を国際的に形成する意図が込められている。第二インターナショナルの社会民主主義者は、戦争を支持したことにより機能不全に陥っていたが、その頃、再建をめざして会議を開こうとしていた。レーニンらはそれに対抗し、別の国際団体を形成する必要を感じていた。第2に、コミンテルンが中心となり、各国の党はそれの「支部」になることである。それは国際社会における中央集権的な体制を意味する。第3に、武力闘争によりブルジョワジーから「国家権力を奪取」し、銀行や生産の「国有化」を行うプロレタリア独裁をめざしていることである。ここから、国ごとにプロレタリア独裁が実現し、それを行う各国の共産党をコミンテルンが統括するという構図が浮かび上

---

(1) Jane Degras (ed.), *The Communist International 1919-1943: Documents*, Frank Cass, 1956, vol.1, pp.1-5. ジェーン・デグラス編著『コミンテルン・ドキュメント』荒畑寒村・大倉旭・救仁郷繁訳、現代思潮社、1969年、第1巻、13-16頁（本稿における訳は必ずしも訳書と一致しているわけではない）。

がる。

この3つのポイントから読み取れるのは、近代以降の社会の秩序形成の土台となってきた国家という装置によって共産主義を実現することだ。プロレタリア独裁は国家なくしては実現しない。こうした独裁のあり方に関しては当初より、社会民主主義の立場をとるカール・カウツキーなどから一党独裁であるとして激しく非難されてきた<sup>(2)</sup>。国家内で民主主義的制度を通じて社会主義をめざす立場からすれば、そうした非難が起こるのは当然だろう。さらに、仮にそうしたプロレタリア独裁国家が多数生まれ、それをコミンテルンが統括するということになれば、ロシアは帝国主義国家と形式的には似た政治形態になるだろう。そもそも資本主義の形成と崩壊を歴史的必然とする唯物史観からすれば、国家はブルジョワジーの支配の道具でしかない。こうした国家観は共産主義に始まるものではなく、19世紀初頭に始まる社会主義思想のなかに根をもつ長い歴史をもっていたので、さほど抵抗なく受け入れられたと思われる。マルクス主義はそれを唯物史観のなかで論理づけた。エンゲルスによれば、「抗争しあう経済的利害をもつ諸階級が、無益な闘争のうちに自分自身と社会とを消尽させないためには、外見上社会の上に立ってこの抗争を和らげ、これを『秩序』の枠内に保つべき権力が必要になった」。この権力が国家であった。だから、国家とは「階級対立を制御する必要から生じた」ところの、経済的に支配する階級が政治的にも支配するための手段であり、歴史の「一定の発展段階における社会の産物」にすぎない<sup>(3)</sup>。

したがって、プロレタリア独裁国家という政治形態は矛盾を孕む。少なくとも緊張感を生み出すはずだ。ブルジョワジーの階級支配を打倒しよう

---

(2) Karl Kautsky, *Die Diktatur des Proletariats*, Wiener Volksbuchhandlung Ignaz Brand, 1918.

(3) フリードリッヒ・エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』戸原四郎訳、岩波文庫、1965年、225-227頁。

とする側がブルジョワジーの支配手段を用いることは、同様の政治支配の形態に陥る懸念があるからだ。おそらくトロツキーは最初からそのことに気づいていた。後にスターリンの一国社会主義と対立するようになったあと、「ソヴィエト国家の階級的性格」という論文のなかで、ソヴィエトは「官僚がその社会的獲物を官僚の方法で防衛するためにプロレタリアートを政治的に収奪するという結果をもたらした」と述べている<sup>(4)</sup>。国家がそれに内在する独自の論理により支配階級を構成することを理解していたがゆえに、永続革命や世界革命の必要を主張したのであろう。プロレタリア独裁国家については、トロツキーだけでなく、他の論者も「過渡的形態」とか「枯死」とかと論じてきた。それならば、プロレタリア独裁を行う国家を世界の歴史のなかで理論的に位置づける必要がでてくる。第4のポイントはこの点に係わる。それは「現在の時期は全資本主義的世界体制の解体と崩壊の時期であり、解決できない矛盾をもつ資本主義が破壊されないなら、全ヨーロッパ文明は倒壊するだろう」という認識が示唆する世界観である。招請状にはこれ以上の説明はないので、同じくトロツキーが起草し、大会最終日の3月6日に満場一致で採択された「全世界のプロレタリアートに対する共産主義インターナショナルの宣言」を参照しつつ、その認識が示す意味について考察したい<sup>(5)</sup>。

その宣言の基礎にあるのは、第一次世界大戦に先立つ数10年間に、産業資本と金融資本が融合した独占資本の成立により、生産と分配をめぐる自由競争がトラストと独占に取って代わられると同時に、独占資本に国家権力が完全に従属したことにより、帝国主義的戦争が引き起こされたという、レーニンの帝国主義論である<sup>(6)</sup>。今般の戦争は、資本主義の発展と分か

---

(4) レオン・トロツキー『トロツキー選集』第5巻、姫岡玲治訳、現代思潮社、1961年、68頁。

(5) J. Degras, *op. cit.*, vol.1, pp.38-47. 邦訳、41-48頁。

(6) ウラジミール・レーニン『帝国主義論』副島種典訳、大月書店、1965年。

ちがたく結びついてきた国民国家が、生産力を増大させるには狭すぎるに至って起こったというわけである。トロツキーはそこからさらに進み、人類を修羅場に追い込んだ戦争の過程において、生産と分配の調停者の役割が国家権力に移譲され、国家のみならず独占資本も完全に軍事化されたと論じる。そして自由競争には戻れないゆえに、帝国主義国家とプロレタリア独裁国家のどちらが国有化された生産の管理をするか、という問題しか残らないとする。そして後者により「人類を新しい夢想だにしなかった高みへと向上させる」と断言される<sup>(7)</sup>。ここで論じられている「帝国主義国家」という概念は、何年か後に出てくるファシズム論のベースになるものだが、この時期、それは減ぶと考えられていた。ここには楽観的な色調がある。大会の前後には多くの国で革命運動が起こっており、革命の機運が高まっていたことが、その背景にあるだろう。

以上よりヨーロッパ文明は、帝国主義国家が倒壊しないなら減び、プロレタリア独裁国家なら人類を「高み」と押し上げるものと理解できる。そうなると、「ヨーロッパ文明」という語の意味が分からなくなる。というのも、エンゲルスは「文明とは・・・分業とそこから生じる個々人のあいだの交換、そしてこれら両者を総括する商品生産が、十全な発展をとげ、それ以前の全社会を変革するような、社会の発展段階である」と述べ、「文明社会を総括するものは国家であり」、それは「例外なく支配階級の国家」であって、「抑圧され搾取される階級を抑制するための機関」であると断じたからである<sup>(8)</sup>。「文明の基礎」は「搾取」だとすれば、文明は国家とともに減びるべき存在だろう。『家族・私有財産・国家の起源』は、所有欲を推進力とし、富を唯一の目標とする文明が終わり、「昔の氏族の自由・平等・友愛の復活」が起こるといふ人類学者L・H・モーガンの予言で終わっている。しかし、トロツキーの言からすれば、文明は資本主義

(7) J. Degras, *op. cit.*, vol.1, pp.38. 邦訳, 41頁。

(8) エンゲルス, 前掲書, 230-233頁。

が崩壊した後に開花するものと定位されている。実際、後の論文にもそうした文明の進化を良しとする文が散見される<sup>(9)</sup>。一体「ヨーロッパ文明」とは何であろうか。

その宣言には、帝国主義国家とプロレタリア独裁国家という二項対立の問題には収まらない、戦争を機に顕在化した政治現象にも言及している。まずはそれに触れておきたい。一つは、帝国主義国家に組み込まれ、ヨーロッパの勢力均衡のなかで「幻想的な独立」を保っていたヨーロッパ小国が、きわめて不安定な位置にあることである。そうした小国は初期には優勢だったドイツに救済を求めたが、ドイツが敗北する頃にはアメリカのウィルソン大統領が唱えた「民族自決」に救いを求め、国境をめぐってお互いに対立している。連合軍帝国主義者も以前の中欧列強と同じで、弱小民族を蹂躪し没落させるだけであり、大国におけるプロレタリア革命によってのみ、それが自由に存在することが保証されるとされた。プロレタリア革命だけが、国民国家の拘束から生産力を解放し、共同経済計画に基づく緊密な経済的協力によって諸民族を結合するので、最弱民族ですら自由に、また独立してその民族文化を開花させる機会が与えられるというわけである。もう一つは、ヨーロッパの戦争に引き込まれ、戦場に送られた植民地の人民が明らかにした「植民地奴隷制」の存在である。宣言は、植民地の多くで起こっているナショナリズム運動は、そうした資本主義的支配の汚辱ゆえに起こったので、階級闘争と同じ意味をもち、したがって、植民地の解放闘争はヨーロッパの民族自決の闘争以上に反資本主義的であるとしたうえで、ヨーロッパのプロレタリア独裁は、植民地の解放にもなると論じる。そして「社会主義的ヨーロッパ」は、技術・組織・精神力をもって、植民地が社会主義経済に移行できるように支援すると述べられている。文字通り「万国のプロレタリア、団結せよ！」である<sup>(10)</sup>。

(9) 例えば、トロツキー、前掲書、第7巻、436頁。

(10) J. Degras, *op. cit.*, vol.1, pp.47. 邦訳、48頁。



トロツキーの宣言において、弱小民族や植民地の解放に関してはロシア革命のときと同じで、「プロレタリアートと農民の民主主義革命」はただちに社会主義革命に成長し、永続革命になると論じられているだけで、その政治過程についての説明はない。どちらも帝国主義国家のなかで生じた問題であり、それ自体が社会主義に向かう道程を変えるほどの意味をもっているわけではないということだろう。そうだとすれば、トロツキーの言う「ヨーロッパ文明」の意味が幾分か明らかになる。彼にとっての文明は、発端をエンゲルスが述べたような商品生産の発展に置くとしても、国家とともに終焉するものではなく、社会主義社会への単線型の進化ないし進歩を遂げるという意味をもつところの、経済・社会・文化の総体をさすと思われる。そうだとすれば、資本主義社会や社会主義社会の基底にあって、それを支える土台と解釈できるだろう。たとえば、それがヘーゲルが論じた「理性」のようなものだとしたら、辻褄が合う。そしてその先端にヨーロッパがいると想定すれば、それは世界と同義となる。当時、国家と呼べるのは20もなく、そのほとんどがヨーロッパにあったことからすれば、ボルシェヴィキが「世界」と「ヨーロッパ」をほとんど同一視して論じることは可能だろう。しかし、プロレタリア独裁国家を乗り越える道を示さなければ、つまりそれを過渡的形態とする歴史過程が分からなければ、永続革命はある種のロマン主義に陥ってしまう可能性がある。そうなれば、ここでは詳説することはできないが、ファシズムと似たものになる危険性があるだろう。

コミンテルン第2回大会は、1920年7月から8月にかけてペテログラードとモスクワで開催された。41か国の代議員217名の出席があり、6か国の代議員54名が出席した第1回に比べてかなり規模が拡大した。この大会で目を引くのは、17か条の規約および21か条の加入条件の承認である。これらのなかで、コミンテルンの目的が、資本主義の打倒と、共産主義の最初の段階である社会主義を実現するプロレタリア独裁の樹立にあることが

高らかに謳われ、そのもとに、加入する政党は共産党を名乗り、社会党や社会民主党などの他の社会主義政党と絶縁すること、加盟政党は鉄の規律が支配する民主的中央集権主義に基づくこと、最高権限は年1回開催される世界大会にあること、執行委員会が次期大会までコミンテルンの全事業を指導することなど、厳格な中央集権的体制がめざされた。吉村忠雄氏の言を借りれば、コミンテルン指導部はいわば「単一の世界共産党の創設」を構想したのであり、実践面でもこれ以降、執行委員会の所在地がソ連以外に移されることはなかったので、「ロシア共産党の地位は不動なものとなっていった」<sup>(11)</sup>。

他方、基本的な理念に関しての変更はない。武装闘争によるプロレタリア独裁の樹立という方針は堅持されている。ただ、ロシア共産党中心に言い換えられているだけだ。たとえば、レーニンが起草した「民族および植民地問題に関するテーゼ」では、「世界の政治的情勢は今や、プロレタリア独裁を時代の趨勢となし、世界政治のすべての出来事は必然的に、一つの中心点、すなわちロシア・ソヴィエト共和国に対する世界のブルジョワジーの闘争に集約されている」としたうえで、われわれの政策は「すべての国の進歩的労働者」をそこに糾合するだけでなく、「すべての民族と植民地の解放運動とソヴィエト・ロシアとの緊密な同盟を実現できるものでなければならない」と論じられている<sup>(12)</sup>。この時期、世界革命は遅々として進まないことへの憂慮はあったろうが、それは遠からず実現するとみなされており、ソヴィエト・ロシアへの一元的な権力集中はそのための手段と考えられていた。

1921年6月から7月にモスクワで開かれたコミンテルン第3回大会では、戦術面で大きな転換があった。第2回大会後の1年間にヨーロッパ各国における労働者階級の蜂起が部分的に敗北し、革命的気運が沈滞化しつつあ

---

(11) 吉村忠穂『社会主義とファシズム』刀水書房、1986年、50-52頁。

(12) J. Degras, *op. cit.*, vol.1, p.141. 邦訳、125頁。

ることから、ロシア共産党は強い危機感を抱くようになっていた。世界の経済情勢は全般的危機を呼び起こすとしつつも、世界革命への楽観的展望はもはやなくなっていた<sup>(13)</sup>。7月12日に採択された「共産党の構成ならびにその活動の方法と内容に関するテーゼ」では、前回大会で承認された共産党指導の中央集権がより一層強く主張されているものの、同日採択された「戦術に関するテーゼ」では、現実の革命闘争において労働者階級の指導権が握れていないことを問題として取り上げることがを宣言した後、今日の差し迫った課題として「労働者階級の多数に対する支配的影響力を獲得すること」をあげている。コミンテルンは予想よりもプロレタリア革命の進展が遅れるという見通しにたって、「過渡期」にあっては「闘争のための用意を最大限にまで高める」ことが必要だとした<sup>(14)</sup>。かくして将来の革命に備えて大衆を獲得することへと舵を切り、「革命的で大衆的な共産党を創造すること」を目標に掲げた。そして攻撃戦術から包囲戦術へ、すなわち武装闘争から大衆浸透へと戦術を転換した。閉会への宣言は、万国のプロレタリアートに向けられた「大衆へ」というスローガンで始まっている<sup>(15)</sup>。

ただし、このことがすぐに統一戦線に向かわせたわけではない。社会民主主義には相変わらず敵対的である。社会民主主義と労働組合官僚制は革命的闘争による政治権力の獲得を放棄しており、それらは資本主義が崩壊し衰滅するこの時期において、平和的手段によって実現される改革プログラムを掲げ、労働者階級を計画的に欺いているとされていた。トロツキーが起草し、7月4日に採択された「世界情勢とコミンテルンの任務に関するテーゼ」では、コミンテルンと社会民主主義の違いは、後者がブルジョワ国家の安定性の再確立を助けるために革命的発展を妨害するのに対して、

(13) *Ibid.*, p.234. 邦訳, 205頁。

(14) *Ibid.*, pp.242-243, 250, 258. 邦訳, 212-213, 218, 224頁。

(15) *Ibid.*, pp.243, 283. 邦訳, 213, 245頁。トロツキー, 前掲書, 第1巻, 312頁。

前者はブルジョワ国家を破壊するためにあらゆる手段を利用することにあるとして、第二インターナショナルの社会民主主義者は「ブルジョワ階級の掌中にあるきわめて貴重な政治的道具」だと断言されている。ここから明らかなように、大衆の獲得という戦術の主眼は、共産主義以外の社会主義を奉じる組織と協調することではなく、むしろ「労働者大衆に支持されている諸党への圧力を増す」ことにより、それらの「陣地を奪うこと」にあった<sup>(16)</sup>。

「戦術に関するテーゼ」のなかで、2つほど注目しておきたい点がある。一つは、大衆の取り込みをめざすなかで「プロレタリア的中間層」、すなわち農民、都市のプチブル、ホワイト・カラーなどの新中間階級に照準し、それを大衆の重要な要素と位置づけていることだ。「戦術に関するテーゼ」では、その生活条件が苦しくなるなかで大衆は政治的無関心から抜け出し、革命か反革命のいずれかに向うとしたうえで、その獲得と組織化がプロレタリア独裁にとってもっとも重要な前提条件の一つとしている。第1回と第2回で中間主義者を叩き出せと言ったが、今や前に進み、党を組織した後、どのようにしたら指導権をとれるかを学ばねばならない、とレーニンは述べた<sup>(17)</sup>。もう一つは、「ファシスト」という語が初めて出てきていることだ<sup>(18)</sup>。ムッソリーニが「イタリア戦闘者ファッシ」を創設したのは1919年3月23日である。その後、ムッソリーニは政権と内通しつつ、イタリア戦闘者ファッシの行動隊が都市部や農村部でテロを繰り返し、多数の死者を出すまでに至っている。1921年5月のイタリア総選挙で与党の統一会派である国民ブロックが結成されたとき、それに参加し、国政に関与することになる。まだその頃には、一般的にそれはイタリア独自の政治運動とみなされていた。「戦術に関するテーゼ」では、そうした見方で

---

(16) J. Degras, *op. cit.*, vol.1, pp.238, 248, 251. 邦訳, 208, 216, 218頁。

(17) *Ibid.*, p.241. 邦訳, 211頁。

(18) *Ibid.*, p.253. 邦訳, 220頁。

はなく、マルクス主義的な論理のなかで「白衛軍」とみなされ、総称的と言える言い方で使われている。もっとも、それに関する詳しい説明がなされているわけではなく、労働組合に対してこの「反革命突撃隊」への注意を喚起することにとどまっている。

1921年12月4日のコミンテルン執行委員会における演説のなかで、グレゴリー・ジノヴィエフは第3回大会の方針を発展させ、「一定の条件のもとでならば、大衆をもっともすばやく共産主義の側に引き寄せるために、第二と第二半のインターナショナルと協働することができる」と、統一戦線を明確に打ち出した。その頃、世界革命への展望はますます開けなくなっていた。そこで発表され、12月18日に採択されたテーゼのなかでは「労働者の統一戦線」というスローガンを掲げ、その下でドイツ、フランス、イギリス、イタリアなどの諸国が、それぞれの国の事情に応じてどのようにそれを実現するかを提示している。具体的には第二と第二半のインターナショナルに属する政党や労働組合と協定を結ぶやり方だが、しかし、それが「プロレタリアートの統一的な大衆行動に共産主義的扇動の支柱を提供するため」という、共産党主導のやり方であることは堅持されている<sup>(19)</sup>。ちなみに、テーゼのなかのイタリアに対する指令のなかに、ファシズムに関する言及はない。また、翌年1月のコミンテルン執行委員会でも完全に無視されていた。その頃ファシストは確実に伸張していた。ムッソリーニが1921年11月に「イタリア戦闘者ファッシ」を「国家ファシスト党」に発展させたとき、とくに地方部においてその勢力は確実に拡大していた。

---

(19) *Ibid.*, pp.307, 313-315. 邦訳, 267, 273-274頁。

### 3. コミンテルン指導部のファシズム論

1922年7月22日の「イタリア労働者に対するコミンテルン執行委員会の宣言」のなかで、コミンテルンは初めてファシズムについて具体的に論じている。イタリアでは「ブルジョワジーは、社会主義指導者がどれほど革命を恐れているかを理解したとき、自分自身の恐怖を忘れ、国全体にテロルの支配を広めるファシスト隊を組織して、数千の革命的労働者を殺害し、彼らの家を襲撃し、情勢を支配するようになっている」として、ファシストが勝利したことを認める。そしてファシストはブルジョワ政府と結託しているがゆえに強力だとしている<sup>(20)</sup>。

第4回大会は1922年11月～12月に開催された。開会して最初に採択されたのは「イタリア労働者に対する宣言」である。その年の10月、ムッソリーニはローマ進軍をはたし、第1次ムッソリーニ政権を樹立していたので、ファシズムは喫緊の問題であった。とはいえ、続く決議、テーゼ、宣言、公開状などは、1921年12月テーゼ、すなわち統一戦線戦術を承認し、それを進めていくことに主眼をおいており、それに基づいて各国の分析と行動指針が示されている。それは「大衆へ」というスローガンの延長にあるので、前回大会から認識と方針の点で大きな変更はないと言える。世界革命に関する悲観的な見方も継続していた。レーニンは演説のなかで、1921年にロシアが実施した「新経済政策（ネップ）」と呼ばれる国家資本主義への「退却」について説明し、持久戦に備えてそれを確実にを行い、各国の共産党も「退却」の可能性を考慮することを力説した<sup>(21)</sup>。先進国の革命がなればソヴィエト・ロシアの存続は危ういものの、革命の退潮は明らかであり、レーニンは何よりも、いかにしたらボリシェヴィキ政権を維持でき

(20) *Ibid.*, pp.363-365. 邦訳, 317-318頁。

(21) *Ibid.*, p.375. 邦訳, 328頁。

るかに腐心していた。

ファシズムに関しては、この大会でそれをマルクスレーニン主義の理論的枠組みのなかでどのように位置づけるかが初めて議論された。12月に採択された「戦術に関するテーゼ」では最初に、資本主義経済は周期的変動を繰り返しつつも衰退期に入っており、その崩壊は避けられないと確認される。次に、国際情勢のなかでそれがいかに表れているかが説明された。そして最後に、そのなかでブルジョワジーが社会民主主義者の助けを借りて、プロレタリアートに対する新たな攻勢を始めていると論じられ、この新たな資本家攻勢の重要な担い手がファシズムであるとされた。窮乏化傾向が大衆を革命的にならしめ、それが中間層にも及び、ブルジョワジーの道具である官僚への信頼を揺るがせるに及んで、合法的手段だけではブルジョワジーは満足せず、いたるところで白衛軍を創設する方法に訴え、それをプロレタリアートの努力を挫折させるために利用している。ブルジョワ支配は今や、このようにプロレタリアートに対する露骨な独裁の形態をとらない限り不可能になっている。しかし、それによってブルジョワ民主主義の基礎そのものが掘り崩されることになる。だからファシズムは、ブルジョワジーがもつ「最後の切り札」と説明された<sup>(22)</sup>。

ファシズムの説明のなかで興味深いのは「国際ファシズム」という呼称を用いていることだ。この時点で、チェコスロヴァキア、ハンガリー、バルカン諸国、ポーランド、ドイツ、オーストリア、アメリカ、ノルウェーにそうした動きがみられ、フランスやイギリスにもそれが現れる可能性を指摘している。実際、数年後にはそうした諸国のすべてで強力なファシズム運動が生まれることになる。そこにはファシズムをイタリア一国の政治運動とする認識はない。ファシズムははっきりと総称的な名称になっている。それは特別な国家のなかの運動ではなく、世界規模の資本主義社会の発展に連動した反革命的な闘争形態であり、その目的はブルジョワジーの

(22) *Ibid.*, pp.416-428. 邦訳, 362-373頁。



支配の強化であるということが、ここで明確に打ち出された<sup>(23)</sup>。

この認識は今後もコミンテルンのファシズム論の土台となる。それを基に、この段階で早くもイタリア・ファシズムを「古典的」ファシズムと呼び、それをファシズムの典型として分析しているが、まだ理論化は進んでいない。たとえば、ファシズムの特徴は、武装した反革命的な闘争組織の形成にとどまらず、民主主義への失望を彼らの目的に利用して、大衆、農民やプチブルジョワジー、さらには労働者の一部にさえも、社会的デマゴギーによって足場を築こうとする点にあるとされるが、そうした運動形態をとる理由には説明が及んでいない。この大会の他の宣言や決議を見ても、「大地主の手に握られている武器」、「反動学生、復員士官、ごろつきのような政治的に動揺した要素以外に労働者や農民プロレタリアからなる精力的な部隊」、「冒険的対外政策を意味する」、「綱領も理想もなく、堅固で統一した階級基盤もない」などと論じられ、ファシズムを台頭させた勢力として、改良主義者、イタリア社会党、プチブルジョワジーなどがあげられているが、どれも理論的な説明にはなっていない。国際ファシズムへの対抗手段に関しても、コミンテルンは各国に共産党を中核として全労働者を結集する反資本統一戦線をつくり、共同闘争を行うという、従来の統一戦術を繰り返すことにとどまっていた<sup>(24)</sup>。

1923年6月にコミンテルン執行委員会第3回総会で行なわれたファシズムに関する決議は、フェリーチェが言うように「理解の深まりをよく示す」とともに、ファシズムの本質を規定するうえで一つの到達点を示している<sup>(25)</sup>。決議を要約すれば、以下のようなになる。ファシズムは現代に特有の頽廃現象であり、資本主義経済の漸次的解体とブルジョワ国家の崩壊

(23) *Ibid.*, pp.376, 421. 邦訳, 354, 367頁。

(24) *Ibid.*, pp.376-378, 424, 428, 435, 447. 邦訳, 329-331, 369, 372, 379, 381頁。

(25) R・デ・フェリーチェ『ファシズム論』藤沢道郎・本川誠二訳, 平凡社, 1973年, 72頁。



の反映である。帝国主義戦争とそれが引き起こした経済的混乱により、中小ブルジョワジー、小農民、インテリゲンチアの生活を破壊した。彼らが希望を寄せてきた改良主義的社会主義者は革命を裏切り、彼らを社会主義への絶望へと追いやった。ファシズムに参加したのは、階級対立の2つの陣営の間で動揺していた彼らだ。ファシズムはプロレタリアートの革命的高揚があったときはそれにある程度同調していたが、資本主義支配が強化されるにつれてブルジョワジーに身を投じた。ファシズムの指導者は最初からそちらにいたからだ。ブルジョワジーは国家という暴力装置ではもはや自らの安全が保障されないので、階級闘争のための特別な軍隊を結集する方向に進む。それを提供したのがファシズムだ。ファシズムはテロリスト的暴力と革命的美辞麗句によって大衆の感情にデマゴギー的に結合するが、そこには内部対立が孕まれている。すなわち、古い官僚制とファシスト的官僚制、正規軍とファシスト軍、自由主義イデオロギーとファシスト政策、国家主義者とファシスト、ファシスト綱領と産業資本に奉仕する現実のファシスト政治、である。その背後には大ブルジョワジーと中小ブルジョワジー・小農民・知識人の対立があるが、さらにその背後にブルジョワジーとプロレタリアートの対立がある。この社会・経済的な内部矛盾によりファシズムは自己解体するのであり、それに向けて革命的前衛と労働者は国際的に反ファシズム闘争を組織しなければならない。こうした決議の最大のポイントは、ファシズムがブルジョワジーの自己防衛の手段に還元され、それゆえに反ファシズム闘争は反資本主義闘争と同義になることにある<sup>(26)</sup>。

1923年の執行委員会総会で採択された決議のなかから、もう一つ取り上げておきたい。トロツキーが提起した「ヨーロッパ合衆国」のスローガン

---

(26) Degras, *op. cit.*, vol.2, pp.39-43. 邦訳書、前掲、第2巻、48-52頁。デグラスの書では前半部が抜粋になっているが、後半部はすべて載っている。フェリーチェの引用は前半部のすべてが掲載されている。フェリーチェ、前掲書、71-76頁。

である。彼はそれを「ヨーロッパ連邦のために時期は熟しているか」と題した同年の論文のなかで唱えたが、それがコミンテルンの文献に現れるのは1926年になってからであり、かなりの反対があったにもかかわらず採択されたとのことである<sup>(27)</sup>。第一次世界大戦による荒廃からヨーロッパ諸国が完全には立ち直れないなか、アメリカが資本主義大国として台頭し、脅威をもって見られるようになったときだったので、そのスローガンに惹きつけられたのも首肯できる。ただし、トロツキーはこの状況に合わせてそれを持ち出したのではない。この主張はかなり以前から論じられていた。トロツキーは1912～3年のバルカン戦争に際し、バルカンの社会主義連邦を論じていたが<sup>(28)</sup>、1914年にはその論理の延長で「共和政ヨーロッパ合衆国」を提起していた。しかし、1915年にレーニンが『『ヨーロッパ合衆国』のスローガンについて』でそれを批判して以降は、あまり表立って論じられることはなくなり「タブー」のようになっていた<sup>(29)</sup>。ファシズムを直接に論じているわけではないが、それは重要な論点を提示している。

トロツキーによれば、今般の戦争の原動力は、資本主義の生産力が国民国家の枠を超えて成長したことにあり、戦争の基底には関税障壁によって阻まれない広範な領域を求めるといふ、生産力の増大に起因する必要性があった。ここから読み取れるのは、国家とは資本主義の発展を基軸とする文明の一ステップにすぎず、世界は統一された経済に向って進んでいくという認識だ。マルクス主義の理論を純粹に追求すればこのような理論になることは理解できる。では、なぜ世界連合ではなくヨーロッパ連合なのだろうか。トロツキーは強大化するアメリカ資本主義に対抗する必要をその理由とする。ヨーロッパは文明の先端にいるが、国家間の戦争で疲弊し、

(27) トロツキー、前掲書、第2巻、482頁。

(28) トロツキー『バルカン戦争』清水昭雄訳、柘植書房新社、2001年。同『戦争とインターナショナル』西島栄・早川潤訳、柘植書房、1991年。

(29) 湯川順夫「トロツキーとヨーロッパ連邦の展望——多民族の共生をめざして」・『トロツキー研究』No. 46、2005年、120頁。

このままいけばアメリカ資本主義に隷属するしかない。そこで文明の見地からヨーロッパを一つにまとめ、「労働者・農民のヨーロッパ連邦」をつくるのが、袋小路に陥ったヨーロッパに残された唯一の道だと論じる。そしてそれは歴史的にみた革命的展望のなかでは過渡的形態にすぎないと強調する。こうしたEU結成につながるような、文明論的な見地から論じたヨーロッパ連邦論を唱えたマルクス主義者は、少なくともコミンテルンのなかには他にいないであろう。

では、なぜ共和政なのか。それは帝国主義に反対するからだ。トロツキーによれば、国民国家の枠で収まらなくなった資本主義は、軍事的手段により他国や他民族を従属させる帝国主義に突き進むしかない。プロレタリアートの階級闘争を麻痺させる抑圧的な国家を打ち破るためには、民主主義を採らねばならない。民主主義こそが「プロレタリアートの発展の条件であり、プロレタリアートが国家権力を獲得しうる唯一の手段である」と論じた<sup>(30)</sup>。では、なぜ合衆国という連邦制になるのか。それはトロツキーが民族自決を唱えたからである。トロツキーは民族を「人間存在の根本的な土台」、「人類の文明における確固たる要素」、「精神文化の源泉」と定位する<sup>(31)</sup>。そして民族自決こそが、帝国主義の時代にあって、それに対抗して民主主義を発展させるもっとも重要な手段であるとした。トロツキーはレーニン50歳の誕生日を記念して書かれた論文のなかで、民族を「人民の実生活にある根本的な力」であって、それと分かちがたく有機的に結びつく必要を説くとともに、この意味でレーニンは深く民族的であると述べる<sup>(32)</sup>。トロツキーにとって、民族は人間の必然的な共同体であった。かくして民族を単位とする「共和政ヨーロッパ合衆国」が実現し、そこで

(30) トロツキー「民族と経済」西島栄訳、『トロツキー研究』No.1, 1991年, 32頁。

(31) 同上, 32, 35頁。

(32) トロツキー「レーニンにおける民族的なもの」西島栄訳,

<https://www.marxists.org/nihon/trotsky/1920-2/lenin-nationalhtm> (閲覧日2021年2月28日)

ロレタリアートが権力を握って社会主義制度が敷かれるなら、国家経済の枠組みや関税障壁から解放され、それぞれの民族が自由に文化を開花させる社会が形成されると論じる。それではトロツキーの永続革命論のなかで、このヨーロッパ連邦の構想はどのような意味をもつのであろうか。トロツキーは「共和政ヨーロッパ合衆国」をあくまで歴史上の過渡的スローガンと位置づける。袋小路に陥って意気阻喪し、アメリカ資本主義の圧迫を受けている現在のヨーロッパに自信を回復させるためには、連邦制が一番の良薬だ。ヨーロッパが自信を回復すれば、太平洋の兩岸の革命を発展させることができ、かくして統一された世界経済への展望が拓かれる、とトロツキーは論じた<sup>(33)</sup>。要するに、ヨーロッパ連邦は世界革命に向けた戦略の一環であった。

このようなトロツキーの論理は確かに透徹しているが、コミンテルン指導層のなかでは、少なくとも全面的には受け入れるのが難しかったと思われる。マルクス主義者の多くは階級闘争を核にして戦術を考えていたので、民族を軽視する傾向にあった。マルクスが「民衆のアヘン」と呼んだ宗教と同じようなものと考えていたのかもしれない。あるいはその重要性に気づいたとしても、そうとはみなしたくなかったのかもしれない。おそらくはそれを意識してであろうが、トロツキーは「民族自決の理念を過去のセンチメンタルな偏見として投げ捨て、経済発展の鉄の必然性に従う」よう勧める人々に対し、それは経済的進歩の歴史的に制限された形態、すなわち帝国主義を持ち出すことになるかと警告する<sup>(34)</sup>。湯川順夫氏は、トロツキーのスローガンを「資本主義ヨーロッパ合衆国」のスローガンと読み換えるハンガリー出身のアメリカ共産党員ベッパーのようなスターリニストを引き合いに出し、完全な二段階革命論的思考に陥っていた人には、永続革命論のダイナミズムがとうてい理解しえなかったろうと述べる<sup>(35)</sup>。だ

(33) トロツキー『トロツキー選集』前掲、第2巻、447-451頁。

(34) トロツキー「民族と経済」前掲、32頁。

が、そのダイナミズムを前提にしても疑問は残る。

民族に関する問題以上に重要なのは、国家の問題である。トロツキーの「ヨーロッパ合衆国」構想は永続革命のための一段階として提起されたものだとしても、アメリカ資本主義の急速な台頭に対抗する意味があったことは否めない。そうなると、政治的には「ヨーロッパ合衆国」も、それが過渡的形態だとしても、アメリカと同様に、またプロレタリア独裁国家と同様に国家になる。国家がどのように消滅するのかの論理がなければ、単に強い国家を形成し、台頭する新しい強国に対抗するに過ぎないことになる。それではベッパーのような反論に正確に応じることはできないだろう。レーニンの「ヨーロッパ合衆国」批判も、この点に向けられていた。レーニンによれば、資本主義が最高の発展を遂げた時代にあつて、世界は大半の領土が一握りの大国の間で植民地ないし反植民地として分割され、10億人の人々が略奪されている。資本主義のもとでは、これ以外の仕方では組織することは不可能である。「ヨーロッパ合衆国は、資本主義のもとでは、植民地の分割協定に等しい」とレーニンは言う。そしてヨーロッパ合衆国ではなく世界合衆国なら、あらゆる国家を消滅されるまでの諸民族の連合と自由の国家形態として可能なスローガンだが、それでもそれが一国での社会主義が不可能との間違つた解釈を生み出すので正しくはないとする。レーニンが描く戦略は、経済発展や政治発展の不均衡性を前提にして、一つの資本主義国でプロレタリアートが社会主義的生産を組織したのち、その他の国の被抑圧階級を自分に引き付け、諸民族のプロレタリアートの力を集中させて社会主義を勝利させるというものだ<sup>(35)</sup>。

トロツキーの理論のなかで抜け落ちているのは国家の意義、つまり存在理由であろう。このことはトロツキーが主張する民族自決を考えてみれば

(35) 湯川順夫、前掲、122-123頁。

(36) レーニン「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」日本共産党中央委員会レーニン選集委員会訳、『レーニン10巻選集』第6巻、1971年、168-171頁。

分かりやすい。民族自決とは、政治や経済において自民族が決定権を有することであり、一般的には権力機構である国家を独自に有すること、あるいはそれができなければ自治権を有することが目的とされる。もしも民族という単位に独自の存在根拠を与え、その自立を認めたならば、独立国家の形成を促すことになる。したがって、言葉通りに民族自決を進めれば、多数の国家の乱立状態になる。それを阻止するために連邦国家をつくれれば、その連邦国家とそれを構成する諸民族との間で決定権をめぐる摩擦が生じざるを得ない。一つ間違えば、旧ユーゴスラヴィアのように、構成諸民族間の内戦になる。この問題は資本主義ではなく社会主義になったとしても同じであり、その問題を解決するために政治的な意味での帝国主義が容易に生まれることは言うまでもない。それは認められないはずだ。仮に連邦国家の機能を経済的なものにとどめたとしても、トロツキーの言うように、それぞれの民族が自由に文化を開花させるためには、政治的・経済的権力の在り方に関する理論が必要だろう。トロツキーもこの問題に気づいており、「課題は、民族の自治的要求と経済発展の中央集権的要求とを調和させることにある」と述べているが<sup>(37)</sup>、理論展開はなされていない。さらに言えば、「民族が自由に開花」させるとされた文化に限ってみても、せいぜいのところ、階級闘争に合致したプロレタリア文化の範疇に入るものを認めるくらいであろう。民族を構成する文化が何であれ、それは民族の統合を促し階級闘争を鈍化させるゆえに、民族文化を重視することはできないはずだ。論理的に考えて、トロツキーの言う社会主義社会における民族文化の開花とは、このような大枠のなかでの話であろう。植民地解放に関しても同様に、その完全な独立や独自文化の全面的容認を言っているわけではないであろう。

コミンテルンの状況に話を戻そう。実は、この時期、それは深刻な内部対立を抱えていた。ロシア革命の中心的指導者であるレーニンは1921年の

(37) トロツキー「民族と経済」、前掲、33頁。

終り頃から健康状態が悪化し、1922年5月初めに脳卒中を起こしていた。レーニン、自分の病気を機にスターリンが陰で策謀をめぐらし、組織を牛耳ろうとしていることを知っていた。追い落とすターゲットにされたのは、レーニンとそのロシア革命以来の盟友で、レーニンの後継者と目されていたトロツキーであった。レーニンは10月に仕事に復帰するとすぐに反撃を開始したが、スターリンはすでに中央委員会書記局の実権を握り、着実に勢力を伸ばしていた。1923年3月6日、レーニンは3度目の脳卒中を起こしてほとんど廃人状態になった。レーニンはスターリンの粗暴で権威主義的な性格や官僚主義的なやり方に危険を感じ、1923年初頭までに書いた遺書には、スターリンを書記長から解任する必要が書かれていた<sup>(38)</sup>。

トロツキーの「アメリカ合衆国」というスローガンが、反対する者が多くいたとはいえ執行委員会で採択されたのは、彼の輝かしい業績によるところが大きいと思われるが、この時期はまだ、コミンテルン指導層内でもある程度自由に議論できる余地は残っていたことにもよるだろう。この意味で、ファシズムに関して傑出した見解を示したのがカール・ラデックである。ラデックはポーランドとドイツの社会民主党で活動した後、ロシア革命以降コミンテルンの指導者の1人になっていた。彼は1923年に「レオン・トロツキー、勝利の組織者」を発表したトロツキーの協力者だった<sup>(39)</sup>。ラデックは「ファシズムと共産主義」と題した1923年の論文のなかで、ファシズムがブルジョワジーの自己防衛手段であることを認めつつも、「戦後の状況に対するプチブルジョワジーの反動」にその根源をもとめる。ラデックによれば、戦争の結果として、多くの中間階級の人々がプロレタリアートに零落した。彼らは戦争によって課せられた重荷から解放

(38) ロバート・サーヴィス『トロツキー』（下）山加太浩生・守岡桜訳、白水社、2013年、28-37頁。菊池昌典『トロツキー』講談社、1982年、96-100頁。

(39) Karl Radek, "Leon Trotsky, Organizer of Victory," <https://www.marxists.org/archive/radek/1923/xx/trotsky.htm> (閲覧日2021年2月28日)



されようと望み、新しい生活様式を見つけようとする。ファシズムはそこに根ざす。ファシストは偽りの民主主義を破壊し、大胆で活力に満ち、全体を支配する能力のある人の支配を唱える。そして「新しい人間」を生み出し、「新しい秩序」を作ろうと訴える。したがって、ファシズムは、一見すると似たように見えるハンガリー政府とは異なる。後者は封建貴族や資本家階級に支えられ、以前の状態を回復しようとする反革命政府である。ラデックはこうした論理に基づき、ファシズムに打ち勝つためには、プチブルジョワジーを味方に引き入れなければならないと力説する<sup>(40)</sup>。確かにラデックは根本的には「大資本が支配を脅かされたときに自己強化のために使う反動」というマルクス主義的範疇で捉えているが、しかし、プチブルジョワジーそれ自体の動態にファシズム台頭の契機を見出している。だから彼は、ファシズムを単なる資本家の道具とみなすことはなく、そこに照準した戦略を説き、プチブルジョワジーにプロレタリアートのイニシアティブを受け入れさせることが、反ファシズム闘争の核心であると主張した。彼のファシズム論のなかでより注目すべきは、「新しい人間」と「新しい秩序」という理念を取り上げたことである。彼は「革命」という言葉は使っていない。しかし、これら2つの理念に注目すればファシズムは革命的とも言える。これらはファシズム・イデオロギーの革命性を表す概念として、今後、マルクス主義以外の立場にたつ研究のなかで重視されていくことになる。

トロツキーも、1931年の「ファシズムとは何か」<sup>(41)</sup>という論文で「ファシズムの真の基盤はプチブルジョワジーだ」と明言しているから分かるように、ラデックと同様にプチブルジョワジーの果たした役割を重視してい

(40) Karl Radek, "Fascism and Communism,"

<https://www.marxists.org/archive/radek/1923/07/trotsky.htm> (閲覧日2021年2月28日)

(41) トロツキー「ファシズムとは何か」西島栄訳、『トロツキー研究』No.61, 2012年。



た。そして都市や農村にいるプチブルジョワジーだけでなく、国家の役人や企業の管理者といった新しい中間階級も含めた広範な基盤を分析し、そこからファシスト運動の形態と特性を導き出すことの必要性を説いた。しかし、それについて詳しくは論じていない。

レーニンは1924年1月21日に亡くなった。その年の6月～7月、コミンテルン第5回大会が開催された。このなかでトロツキーとスターリンの敵対に根ざすさまざまな対立が顕在化した。とくに1923年10月のドイツ共産党の蜂起失敗の後だったため、よけいに激しいものになった。「ファシズムに関する決議」に見られるように、ファシズムに関しては、1923年6月の決議がそのまま踏襲され、「プロレタリアートと闘うためのブルジョワジーの道具」としてのプチブルジョワジーの運動とされた。さらに、それは表面的には、資本主義の危機から生まれた大衆の不満の表現のようだが、実際には国家の助けによって保守的大ブルジョワジーが操る「反革命の古典的形態」であるとして、階級論の立場からより単純化された。こうした定式化において、もはやブルジョワジーとプロレタリアートの二項対立図式以外のことは、さして重要ではなくなっていた<sup>(42)</sup>。ファシズムを支えた社会的諸力という点で、この決議のもつ意味は深い。コミンテルン第5回大会以降、この公式見解と違う意見をもつことが難しくなった。そしてプチブルジョワジーや中間階級をファシズムを支える要素として論じることが異端めいたものになった。それを言ったとしても、二義的なものにすぎず、価値のないものになった。「戦術に関するテーゼ」では、第3回と第4回の大会で採択された「大衆へ」という方針が不変であることが確認された。また、革命の方法としての統一戦線戦術がいまなお有効であることも確認された。この大会でとくに強調されたのは、各国諸党をコミンテルン各支部としてポリシェヴィキ化し、統一世界共産党を形成すること

---

(42) Degras, *op. cit.*, vol.2, pp.137-140. 邦訳, 134-136頁。

だった<sup>(43)</sup>。

1924年秋、トロツキーとスターリンの対立は過激化し、スターリンはついに反トロツキズムのキャンペーンを始めた。理論的には「世界革命論」対「一国社会主義」の対立に焦点が絞られた。スターリンが「一国社会主義」を提唱したのは5月だったが、秋にはその内容を変え、ロシア一国で社会主義建設が可能とした。そして永続革命論の立場から世界社会主義をめざすトロツキーの世界革命論に真っ向から反対した。ネップを巡っても、それを支持するスターリンらの右翼と、資本主義への行きすぎた譲歩であるとして反対するトロツキーらの左翼に分かれて対立した<sup>(44)</sup>。1925年4月の執行委員会で採択された「共産党のポリシェヴィキ化に関するテーゼ」において、スターリンが指導権を握り、彼の意図する方向にコミンテルンが舵を切ったことが、以下の点で明らかになっている<sup>(45)</sup>。第1に、世界革命の減速を認めたくえて、コミンテルン各支部のポリシェヴィキ化を強めたことである。現実主義的なスターリンは何よりもソヴィエト・ロシアを反革命的勢力から守ることに執着していた。そのためには、前衛が指導する中央集権型の組織の形成と強化をコミンテルンに所属する諸党においても、またコミンテルン自体においても実現することにより、プロレタリア独裁を行うロシアを中心とした統合を強化することが必要と考えていた。第2に、反トロツキーを公の場で明示したことである。トロツキズムは「レーニン主義からの部分的に危険な逸脱」であり、「左翼—急進的な言葉遣い」をする「ヨーロッパ的な日和見主義と結合したメンシェヴィズムの変種」であると断罪された。ロシア革命の立役者であったトロツキーをレーニンから引き離すことで、自分がレーニンの正当な後継者であることを示そうとしていた。この流れのなかで、1925年のうちに、スターリ

(43) *Ibid.*, pp.142-156. 邦訳, 139-150頁。

(44) サーヴィス, 前掲書, 68-71頁。菊地昌典, 前掲書, 99-102頁。

(45) Degras, *op. cit.*, vol.2, pp.188-205. 邦訳, 178-187頁。

ンの「一国社会主義論」が党の方針として定着した。また、ロシア共産党がソヴィエト連邦共産党に名を変えた。

コミンテルン第6回大会は1928年7月～9月に開かれた。この大会ではニコライ・ブハーリンが傑出した役割を果たし、報告や提案を中心的に行ったが、実質的に指導権を握っていたのはスターリンだった。トロツキーは1925年にコミンテルン執行委員会の中枢から外された後、1927年9月に党から除名されていた。ラデックも同じ年に除名されていた。この大会の最初に採択された「国際情勢と共産主義インターナショナルに関するテーゼ」では、1925年のテーゼで提示された方針に従い、各国のポリシェヴィキ化によりプロレタリア独裁の国たるソヴィエト連邦を擁護し、トロツキストを除去することが述べられている。この大会ではさらに、「社会ファシズム論」が党の方針として承認された。「社会ファシズム論」とは、社会民主主義とファシズムは対立物ではなく、双生児であるという理論である。この理論は1924年のコミンテルン第5回大会で提示されていたが、第6回大会では主要な敵は社会民主主義であると規定するほどに極端なものになっていた。そのうえで、トロツキズムは社会民主主義とほとんど同義とされ、安易に統一戦線を唱えるその階級協調的イデオロギーはファシズムのそれと多くの接点をもつとまで言われた<sup>(46)</sup>。

この大会で採択された「綱領」は、これまでコミンテルンが出した文書のなかで、おそらくはもっとも詳細かつ包括的に、またもっとも論理整合的に資本主義の歴史と現状、そしてそれに基づく共産主義の戦略と戦術を論じている。フェリーチェによれば、これは以後数年の間、教科書のようにになっていた<sup>(47)</sup>。ただし、内容に関しては、「社会ファシズム論」を除けば取り立てて目新しいものはない。ファシズムに関しては、帝国主義の時代に階級闘争の激化により議会主義が破産したとき、多数の社会的脱落分

(46) *Ibid.*, pp.446-455, 459, 463. 邦訳, 409-418, 422, 425頁。

(47) フェリーチェ, 前掲書, 69頁。

子の存在，プチブルジョワジーやインテリ層の窮乏化と不満，プロレタリアからの脅威といった一定の歴史的條件において，ブルジョワジーがしかけてくる暴力的攻撃であり，また，その主たる役割は労働者階級の革命的前衛を全滅させることにあるという以前の定式が繰り返された。そして社会民主主義もまたこの役割を果たすので，労働者階級のなかでブルジョワ利益に奉仕するという意味ではファシズムと同じとされ，「社会ファシズム論」がより強く唱えられた<sup>(48)</sup>。

最後の大会となったコミンテルン第7回大会は1935年7月～8月に開かれた。すでにドイツでは1933年1月にヒトラー内閣が成立し，3月には全権委任法が成立して独裁政治を始めていた。独伊以外の国ではファシズム政権が生まれることはなかったものの，どこでもファシズム政党が勢力を伸ばしていた。ファシズムの脅威に直面して，この大会では大きな戦術の転換が図られた。8月1日の決議では，「共産主義インターナショナル第7回世界大会は，共産主義インターナショナル執行委員会ならびに第2インターナショナルに加盟するすべての党に対し，国際的規模のみならず国民的規模においても，何としても統一戦線を樹立するよう今後とも尽力することを命ずる」と宣言され，統一戦線戦術が承認された。すでにフランスでは，1934年2月6日のパリ騒擾事件でファシストの台頭が現前たるものになった後，社会党と共産党が反ファシズム勢力として共同行動をとるようになっていた。8月20日の決議では，こうしたフランスの統一戦線運動に向けた動きが成功していることを高く評価したうえで，「労働者階級の統一戦線を樹立することこそ国際労働運動の緊急な任務である」と宣言された<sup>(49)</sup>。こうして強大な大衆運動に支えられている統一戦線政府に入閣すべきとされたことにより，「社会ファシズム論」が廃棄されることになる。パルミーロ・トリアッティによれば，ブルジョワ民主主義政府を擁

(48) Degras, *op. cit.*, vol.2, pp.484-485. 邦訳, 440-441頁。

(49) *Ibid.*, vol.3, pp.353, 360-361. 邦訳書, 前掲, 第3巻, 327, 333-334頁。

護するのは、それがいかに反動的であろうと、そのほうがファシスト独裁よりは、労働者階級にとってはずっとましだからだ。ゲオルギ・ディミトロフもまた、今の問題は、ブルジョワ民主主義とプロレタリア独裁の間の選択ではなく、ブルジョワ民主主義とファシズムとの間の選択だと言う。もっとも、真の自由はプロレタリア独裁によってのみ獲得できるという点は死守されている<sup>(50)</sup>。

大会を主導したディミトロフの演説は、コミンテルンが辿り着いた論理を集約している。彼は「ファシズムは金融資本のなかでもっとも反動的・排外的・帝国主義的なテロ独裁だ」と断じる。ブルジョワジーの階級支配の国家形態がブルジョワ民主主義からテロ独裁に代わっただけということであり、後者は革命が近いこと知った支配的ブルジョワジーが一挙に政治的独占を打ち立てる方法である。それは「野蛮と野獣性」が支配する「政治的ギャング」の統治体制だ。大衆がそれを支持したのは、ブルジョワ政党に失望した人々がその欲求に訴えるデマゴギーによって取り込まれたからであり、反動と反革命という基本的性格に変わりはない。その階級的性格を理解していれば、そのようなことはなかった。ドイツ・ファシズムにしても「大ブルジョワジーの従僕の役割しか果たしていない」とされた。このようなファシズムについての説明のなかに、ファシズムを惹起した中核的要素としてプチブルジョワジーが入り込む余地はない。それは意味のないことと切り捨てられた<sup>(51)</sup>。

#### 4. コミンテルン指導部以外のマルクス主義者のファシズム論

コミンテルン指導部以外に目を移すと、ファシズム論のかなり豊かな拡

(50) *Ibid.*, vol.3, pp.346-349, 359. 邦訳, 320-322, 332頁。ゲオルギ・ディミトロフ『反ファシズム統一戦線』国民文庫社, 1955年, 39, 42, 51, 52頁。

(51) Degras, *op. cit.*, vol.3, pp.360. 邦訳, 333頁。ディミトロフ, 前掲書, 14頁。

がりがある。まずは、コミンテルン指導部、すなわち正統派マルクス主義の見解に近いものから2人取り上げたい。1人はオーストリア社会民主党のオットー・バウアーであり、もう1人はケンブリッジ大学教授のモーリス・ドップである。2人ともマルクス主義の基本的解釈に基づきつつ、前者はファシズムを戦後における階級構造の独特な変化に、後者は帝国主義の発展した段階における危機的状态に重点を置く。

バウアーはオーストリア・マルクス主義の代表的な理論家である。1907年に25歳という若さで『多民族問題と社会民主党』という大著を著し<sup>(52)</sup>、その年にオーストリア社会民主党の書記局員になっている。すぐに同党の月刊誌『闘争』を創刊し、理論展開の拠点にするとともに、党機関紙などでも旺盛な執筆活動を始めた。第一次世界大戦に従軍し、ロシア軍の捕虜となる。3年近く経ってから釈放され、その後、反戦を唱える社会民主党左派に合流した。1918年1月のストライキに始まる政変のなかで、10月に左派に指導権が移った社会民主党とキリスト教社会党が中心になった臨時政府ができ、11月に憲法が公布されて共和政が成立する。その直前に亡くなった社会民主党党首ヴィクトル・アドラーに代わって、バウアーが外相になった。しかし、バウアーが唱えたドイツとの連邦制は実現することなく、翌年辞任した。社会民主党も、1920年に労働者評議会の反対にあって政権の座を降りた。バウアーはボリシェヴィズムに一体化しないオーストリア社会主義を主張し、アドラーの息子のフリードリッヒとともに社会民主党を指導した。オーストリア・ファシズムが台頭するなか、武装蜂起に失敗し、1934年にチェコに亡命した。1938年にチェコがナチス政権によってドイツに併合されるとフランスに亡命し、そこで逝去した<sup>(53)</sup>。

---

(52) オットー・バウアー『民族問題と社会民主党』丸山敬一他訳、お茶の水書房、2001年。

(53) バウアー『オーストリア革命』酒井農史訳、早稲田大学出版部、1989年、423-439頁。

ここで取り上げるのは、1936年に出版された『ファシズム』である<sup>(54)</sup>。そこで提示されるファシズム論には、彼の名を高めた民族性原理やそれに基づく国家編成の論理は、不思議なことにまったく出てこない。バウアーはあくまでもマルクス主義的な階級分析を基底におき、特殊な歴史的事情から生み出される社会プロセスによって階級構造が独特な変化を遂げるところに、ファシズムの発生源を見出す。バウアーによれば、そうした社会プロセスは3つの事態の絡み合いからなっている。以下、要約してみる。

第1は、出征軍人がブルジョワ生活に戻れずに私的な軍事組織を作ったことだ。それを先導したのはインテリゲンチヤであった。ドイツやイタリアでは議会の歴史が浅く、彼らは民主主義に失望していたが、粗野で無教養な大衆の支配も嫌っていた。彼らのもっていた生の哲学は戦争のなかで熟成し、戦後の深刻な危機的状況のなかで簡単に反民主主義的なナショナリズムに結合した。それは好戦的な英雄主義、反ブルジョワジー、反プロレタリアートの特徴をもち、規律ある軍隊組織を社会のなかに持ち込むことを促した。この動きに呼応したのが、戦後の経済危機によって貧困化したプチブルジョワジーと農民であった。彼らは貧困から守ってくれなかった民主主義を恨み、かつ労使の賃金闘争は貧困を増幅したと考えていた。そこで現状からの脱却の道をファシズムに求めることになった。これが第2の事態であった。第3の事態は資本家階級の動きである。経済危機によって利益が減少した資本家は労働者階級に対する搾取を強めていた。資本主義が発展する時期、資本家階級と改革派社会主義者や労働組合との賃金や労働時間をめぐる闘争は、資本主義をより高いレベルに引き上げる。しかし、深刻な経済危機のもとでは、そうした闘争による労働者の成果は障害と思える。そこで資本家階級は彼らの抵抗を抑えつけるために、ファ

---

(54) Otto Bauer, *Der Faschismus*,

<https://www.marxists.org/deutsch/archiv/bauer/1936/zwischen/faschisms.htm> (閲覧日：2021年2月28日)



シズムがプチブルジョワジーと農民の大衆運動になった後、この暴力的な集団を利用しようと決めた。これによってはじめて、ファシズムは重大な政治権力として現れることになる。資本家階級であるブルジョワジーと大地主は多額の助成金をファシストに与え、失業者を吸収した。また、その「懲罰的遠征」は大衆に暴力の魅力を与えた。ところが、このことによってファシストの軍隊は強くなりすぎ、それを道具と考えていたブルジョワジーや大地主は、すぐにそれが制御できないことを悟った。そしてプロレタリア解放かファシストの暴力容認かの選択で後者を選び、国家権力を渡した。

こうしてファシスト独裁が始まったが、バウアーは、それがブルジョワ支配の終焉や弱体化を意味するとは捉えない。逆に、ファシストの支配システムはすぐにブルジョワジーの階級支配の道具に変えられたとする。確かに最初、ファシズムは反資本主義的な感情をもつプチブルジョワジーと農民の大衆に依存していたので、資本家階級に傲慢な態度をとってその組織を指導下におこうとした。しかし、すぐにファシスト内部のユートピア志向の過激主義者は排除され、資本家階級の影響下におかれるようになる。イタリアでは1923年～1926年にかけて「2回目のローマ進軍」を唱えた反乱分子は追放され、ドイツでも1934年6月30日にSAの反乱分子が粛清された。こうしてファシズムは、大資本の支配する「国家権力の従順な道具」に変貌した。バウアーはこの過程について、ファシスト独裁は必然的に「資本家階級の意志であるその利害的欲求の執行機関」<sup>(55)</sup>になるとする。その理由については、次のように説明される。ブルジョワ民主主義では資本家階級は階級支配を維持するために、経済メカニズムについて説明し、大衆の利益と意見を考慮しなければならない。ファシスト独裁のもとでもこのメカニズムは同様に作用するので、国民経済の進路は利益率に依拠せ

---

(55) *Ibid.*, p.12.



ざるをえない。したがって、資本家階級は国民経済に関して指導権をとることになる。そうなれば、ファシズムを支える大衆との間に齟齬が生じることになる。そこでファシズムは自由な議論や報道を封殺し、自由な組織や選挙も廃止し、「全体主義的」な独裁のもと大衆に沈黙を強いる。そしてマスメディアの技術的発展と暴力の日常化により、その国家支配力をかつてのいかなる体制よりも強化し、大衆の精神にまでその力を及ぼすことになる。こうしてブルジョワジーの利益は国民の利益と偽装され、大衆の利益の増大として喧伝される。パウアーはこのようにファシズムの構造を論理的に明らかにし、自由主義的な資本主義システムのように支配階級と支配者が同一であることはなく、ブルジョワジーと大地主が支配カーストを利用して独裁を行うと断じる。

パウアーの論理は明晰であり、発達した資本主義をもつが民主主義的制度が弱体化した国家が重大な経済危機に陥ったときに出現するところの、「資本家階級の新たに発見された独裁形態」であるとまとめることができる<sup>(56)</sup>。この論理によれば、民主主義が発達していれば、経済危機であっても、ブルジョワジーの利益を損なわない範囲で、プロレタリアへの抑圧を防ぐことで、暴力的集団の台頭を阻止できる。イギリス、フランス、アメリカでファシズム勢力が台頭したにもかかわらず、それが政権をとるまでには至らなかったことは、それによって説明がつく。また、パウアーがファシズム政権としてあげたのがイタリアとドイツの2か国だけであり、1918年の革命以降に起こったポーランド、ユーゴスラビア、ハンガリー、ブルガリアの独裁政権はファシズムを模倣するところはあるとしても、ファシズムではなく、基本的に反革命的で反動的な性格をもつ軍事独裁であるとした理由も、同様に理解できよう。

ドップは主にアカデミックな世界で生きたマルクス主義経済学者である。

---

(56) *Ibid.*, p.1.

ファシズムに関しては、1937年に出版した『政治経済学と資本主義』で論じており、その邦訳者はその作品によってドップは近代経済学批判の第一人者となったと解説している<sup>(57)</sup>。ドップはイギリス共産党に所属していたが、別段コミンテルンに従順であったわけではない。時に批判的な言説をソヴィエト連邦に対してもしていた。しかし、その本で提示した基本的な論理は、コミンテルンが提示した正統なマルクス主義解釈と大きな差異はない。精緻な議論によってそれを補っていると言えよう。

ドップによれば、近代帝国主義の特徴は、金融資本と産業資本が合一化するとともに産業の決定が金融戦略に従属する独占資本主義の段階において、植民地地域に資本投下することである。その動因となるのが、植民地地域への投資の高い利潤率、ならびに海外投資による本国の余剰価値率の維持である。だから、植民地獲得をめざすのは人民を豊かにするためではなく、大企業のための「独占的狩猟場」を求めてである。帝国主義は重商主義とは異なり、後進国の産業資本主義を育成し非植民地化させると言われることがあるが、それはまったくの間違いである。本国と植民地の貿易関係の拘束、ならびにそれを通じた搾取という点では重商主義と同じである。というのも、資本輸出は有利な資本投下を行う条件を作り出すために、植民地経済の内的諸関係や構造に対する大規模な政治的支配を必要とするからだ。ここには帝国主義の政治的論理が働いており、経済的浸透→勢力圏→保護領ないし間接統治→軍事的占領と併合へと至る。ドップは、帝国主義のこうした束縛的・独占的側面は帝国主義の最近の発展段階において特に顕著になっていると指摘する。その特徴は、独占的利益を求めて、新しい地域だけでなく近隣地域に対しても政治的触手を広げる膨張主義にある。この新しい膨張主義を促した事情は、国境内での産業予備軍の枯渇と

(57) モーリス・ドップ『政治経済学と資本主義』岡稔訳、岩波書店、1952年。原書初版は1937年で、1940年の改訂版で第4章後半に変更を加えている。訳書の原本は1940年版である。

技術水準の高度化に対応した産業の発展の必要性によって資本の収益性が低落すること、そして生産手段の技術的発展により資本の集中が進み独占がますます促進されることである。外国における新投資分野を追求する新しい帝国主義の時代のなか、第一次大戦後に資本主義の病弊に根ざす動き、すなわちファシズムが現れてきたと言う<sup>(58)</sup>。

ファシズムとは、搾取の分野の発展を内外で塞がれる可能性という独占資本主義に内在する危機が、一定の歴史的條件が揃ったときに実現する政治形態である、とドップは定義する。その歴史的條件とは、第1に、投資分野の行き詰まりを正常な方法で打開できないことである。ドイツとイタリアは過去において植民地政策に依存していたが、第一次世界大戦後、はっきりと植民地的野心を阻止されていた。帝国主義の発展にはもともと国や地域ごとの発展の不均衡が含まれていたが、それが拡大したことで世界の共同的平和を創ることはますます不可能になっていた。第2に、抑圧された中間階級が他に勢力をもちかえす方法がないことである。中間階級の零落は、ファシズムの台頭と並ぶ戦後の病理と論じられた。この状況が深刻になるのは、過去において帝国主義による恩恵を受けていたが、第1の理由によりそれができなくなった国である。第3に、労働階級が分裂のためもしくは階級意識の欠如のため政治的に弱体であることであり、そのことは没落した中間階級の要求を汲み取れるだけの労働者組織がないことを意味した<sup>(59)</sup>。

ファシズムの性格はこれらの歴史的條件によって決められることになる。ドップはファシズムの歴史的役割として、大企業のために労働者組織を破壊することと、戦争に備えて中央集権的かつ権威主義的に国民を組織化することをあげる。唯物史観の見方から「歴史的役割」という語を使ったと思われるが、この2つはそのままファシズムの中心的政策ともみなされて

---

(58) 同上、220-236頁。

(59) 同上、240-250頁。

いる。また、その基盤としてプチブルジョワジーを考えていたことが、第2と第3の歴史的條件から分かる。ファシズムが急進主義的なデマゴギーによる宣伝で大衆を組織化しようとしたと言うとき、その大衆の主体はプチブルジョワジーであるから、ファシストは最初のうちは革命的な言辞を弄していたし、何よりもプチブルジョワジーが引き寄せられる可能性がある労働組合を解体することをめざしていたと理解できる。ファシストが唱える「革命」はせいぜい「宮廷革命」にすぎないとドップは言う。ムッソリーニが唱えた職能組合国家という概念も、ドップの論理では労働組合を破壊し、労働者を国家に組み込むための手段にすぎない。というのも、ファシズムは最初から「大企業の利益のため」に動く「大資本への奉仕者」であるという点で、ドップは一貫していたからだ<sup>(60)</sup>。労働者を取り込んだ後、ファシズムは軍事的征服と植民地獲得の復活をめざして政治的独裁を行うとされるが、これは第一の歴史的條件を打開するための政策ということになる。論理的に考えれば、これこそが行き詰った独占資本の行先になるので、ファシズムの中心にある動因であるとドップは考えていたと思われる。

次に、政治社会学的な視点を組み入れて独創的な理論を提示した2人のマルクス主義者、アウグスト・タールハイマーとリヒアルト・レーヴェンタールを取り上げたい。タールハイマーは第一次世界大戦時までドイツ社会民主党の党員で、党機関紙の一つ『民族の友』の編集に携わるジャーナリストだった。1919年1月1日に結党したドイツ共産党の創設者の1人であり、その理論家として知られていた。1924年から1928年までモスクワでコミンテルンの仕事をしてきた時期もある。ドイツ共産党に戻ってすぐに内部抗争のなかで除名され、1928年の終りにドイツ共産党（反対派）を結成している。それはコミンテルン支持の中道派とも、トロツキストの左派

---

(60) 同上、233-250頁。

反対派とも区別される右派の反対組織であり、最初のうちは新政党というよりもドイツ共産党の改変をめざしていたが、後にそれに代わろうとした。ヒトラー政権誕生の後に非合法化され、1940年頃に消滅した。タールハイマーはフランスやスペインで活動した後、1948年にキューバで亡くなっている<sup>(61)</sup>。

タールハイマーは、ファシズムがルイ・ボナパルトのボナパルティズムと類似していることを説いた最初の学者であろう。根拠となる論理と分析の方法は、マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』<sup>(62)</sup>から着想を得ている。マルクスによるボナパルティズムの分析は、下部構造に一元的に還元する俗流マルクス主義とはかなり異なる。そこでは、ルイ・ボナパルトが第二共政のなかで大統領に選出されながらも、クーデターによって独裁体制を樹立し、その後ナポレオン・ボナパルトに倣って国民投票により皇帝の座に就き第二帝政を始めた過程が、歴史的状況によって規定された階級関係の動態として、生き生きと描かれている。そのとき独自の組織をもたずに分裂して弱体であったブルジョワジーは、労働者階級による革命の脅威を前にして権力の基盤であった議会を放棄し、政治権力を「独立した執行権」に委ねた。帝政を支持したのはブルジョワジーだけではない。私的所有を守ろうとした農民もそうである。さらに、貴族の放蕩者、ブルジョワ崩れ、放浪者、除隊兵士、香具師、詐欺師、女衞、乞食、泥棒などの「ボヘミアン」もそうだった。彼らはブルジョワ社会や私的所有を破壊する気はない。ルイ・ボナパルトは慈善協会をつくり、この「ルンペンプロレタリアート」のボスになった。こうした階級構造は、帝政を支えるうえでもっとも重要な組織であった軍隊に反映されている。圧倒的な勢

---

(61) Martin Kitchen, "August Thalheimer's Theory of Fascism," *Journal of the History of Ideas*, vol.34, 1973.

(62) カール・マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』市橋秀泰訳、新日本出版社、2014年。

力として大衆支配に役立った軍隊を構成したのは、小農民やボヘミアンである。彼らにとって兵役は職業であり、彼らは権力の道具としてもっとも重宝な存在であった。このような諸階級の絡み合いの上に、栄光あるナポレオンの伝統というナショナリズムが被さって、体制が正統化された。そこに含まれる封建主義に対する勝利、反革命からの私有財産の保護、ブルジョワジーの搾取の制限、軍隊の栄光といった観念は、多様な階級を結びつけた。

マルクスはこのように諸階級をもとに体制構造を解き明かすとともに、イデオロギーが果たす役割も正当に評価している。しかし、近代社会が根本的にブルジョワジーの支配する社会であるという論理に変わりはない。そこで、ブルジョワジーが政治的支配能力を失っているものの、労働者階級がまだそれに置き換わる力がないとき、帝政は唯一可能な統治形態であると結論する。そして同時に、そこには解きたい矛盾があることも指摘する。執行権の独立は「市民的秩序」を守るためだが、その強さの源はブルジョワジーにある。ところが皇帝の立場はブルジョワジーの権力を破壊し続けることに依拠するという矛盾である。ブルジョワジーは「自分の財布を守る」ために剣を投げ捨てたが、この剣は頭上に吊り下げられた「ダモクレスの剣」である、とマルクスは述べる<sup>(63)</sup>。

タールハイマーは1928年に書いた論文のなかでこのようなマルクスの論理を受け継ぎ、プロレタリア革命の脅威に直面したときにブルジョワ国家権力がとる究極的な防御形態という点で、ボナパルティズムとファシズムは類似すると論じる。また、方法論的にも、階級的基底だけでなく、歴史的に生み出された階級間の関係、国家の組織的形態、イデオロギー的現象形態も視野に入れて、ファシズムを多角的に分析している<sup>(64)</sup>。しかし、言うまでもなく両者の間には80年近い時間差があり、そこからさまざまな

---

(63) 同上, 87, 97, 174-5頁。

疑問が生まれてくる。ボナパルティズムがブルジョワ国家権力の究極的形態だとしても、その後、コミューンの時代を挟んで第三共和政が成立し、ブルジョワ議会政治が続いてきた。また、ルイ・ボナパルトの時代のフランスは自由主義的な段階にあり、その後に興る独占資本主義に基づく帝国主義の時代ではなかった。資本主義の発展段階が明らかに違う。さらに、資本主義がもっとも発展したアメリカ、イギリス、フランスでは、ブルジョワ議会が支配する共和国であって、ファシズム国家ではない。ファシズムが興っているイタリア、ポーランド、ブルガリアなどは農業国であり、経済発展では遅れをとっている。これらのことをどのように説明するのだろうか。

それに対してタールハイマーは、こうした矛盾の解明はむしろマルクスの分析の奥深さを明らかにし、ファシズムの本質を見つけるのに役立つと指摘する。そして「資本の公然たる独裁 die offene Diktatur des Kapitals」という概念をつくり、そこにボナパルティズムとファシズムの共通点を見出す<sup>(65)</sup>。それが意味するのは、プロレタリア革命に直面したブルジョワジーが、ブルジョワジーを始めとするすべての階級の支配権を掌握する独立した国家権力に委ねる政治形態である。これがブルジョワ国家権力の究極の形態であり、ボナパルティズムとファシズムの違いは、歴史的状況によるこの形態の現れ方によるとされた。独裁者が「皇帝」と名乗るか「指導者」と名乗るかはそれを示したもので、大した問題ではない。

タールハイマーによれば、ブルジョワジーの「公然たる独裁」は反復不可能な現象ではない。それは階級間の特定の関係と関連し、それが再現さ

---

(64) August Thalheimer, "Über den Faschismus," Geschrieben 1928 als internes Dokument der Komintern. Veröffentlicht in *Gegen den Strom*, theoretischer Zeitschrift der KPD (O),

<https://www.marxists.org/deutsch/archiv/thalheimer/1928/xx/fasch.htm>

(閲覧日：2021年2月28日)

(65) *Ibid.*, p.8.



れば再び起こることもある。アメリカ、イギリス、フランスでファシズムが勝利しないのは、ブルジョワ階級の強力な政治的支配があったからだ。それに対してルイ・ボナパルトの政治的基盤は、王政のときから支配していた金融貴族ではなく、若くて野心的な産業ブルジョワジーにあった。後者は強力な党を形成するほどの伝統や自由がなく、弱体であった。イタリアにおいても、王政のもとで強力な伝統的支配階層が存続し、ブルジョワジーが安定した権力基盤を築くことができないでいた。イタリアのファシズムは、ボナパルティズムと同様に、独立した国家権力を持ち、ブルジョワを含むすべての大衆を支配している。ファシズムはブルジョワジーを政治的に従属させ、プロレタリアートへの搾取をやめさせてその物質的利益を保護したので、国家はブルジョワジーと労働者の「仲介者」とみなされている。ファシスト党の構成にしても、貴族、上層ブルジョワ、中小のブルジョワ、農民、労働者にいたるまですべての社会階級が含まれている。とくに重要なのは、マルクスが「ボヘミアン」と呼んだ階層である。それを取り込むためには国家機構を継続的に拡大し、そこに組み込むことが必要だ。しかし、それは経費の抑制というブルジョワ的利益とは対立することになり、そこで矛盾を抱えることになる。ファシズムはボナパルティズムと同じく「秩序と平和」を約束したが、この矛盾のなかでそのための「救世主」であることを証明するためには、社会が常に脅威に晒されていると信じ込ませる必要がある。ファシズムの場合、そこに民兵組織の「ギャング」を利用したテロや略奪が横行する理由がある。さらに、戦争の危機をさかんに喧伝することの理由もそこにある。ファシスト政権は帝国主義が課す国際的階級闘争と戦争の時代のただなかにあるので、独裁者は容易に戦争を始めることができた<sup>(66)</sup>。

タールハイマーはこのように、ボナパルティズムとファシズムの比較を

---

(66) *Ibid.*, pp.10-17.



通して、一定の社会的・経済的条件のもとで動態化する階級構造から、安定したブルジョワジーの支配とは異なる独裁権力が生まれる様態を描いた。それは政治社会学的見地に立ったファシズム理解のベストな試みだという評もあるが<sup>(67)</sup>、レーヴェンタールもまた高い評価を受けている。レーヴェンタールは大学生の頃にドイツ共産党に入っていたが、コミンテルンを批判し、3年で辞めている。1933年に反ナチス集団を組織したものの、すぐに弾圧にあって海外を転々とすることになる。第二次世界大戦後は報道記者を務めた後、ベルリン自由大学の政治学教授になっている。ここで取り上げる1935年発表の「ファシズム」という題の論文は、反ナチス集団にいたときに使っていたパウル・セリングという別名で書かれている<sup>(68)</sup>。この論文はマルクス主義的な階級論に基づいてはいるが、歴史的状況によって変転する階級関係の動態が、近代的な民主主義システムや独自の存在理由をもつ国家という装置と絡み合うなかでファシズムが生まれたという独創的な作品である。

そのなかでレーヴェンタールは、それまでのファシズム論が「調査の最初に恣意的な定義をおくか、あるいは近代的独裁に関する決議論のなかで迷子になるか」のどちらかだと、これまでのマルクス主義的な研究を暗に批判し、多角的な視野から社会的関係を考察する必要性を説く。彼が最初に注目するのは、ここ数10年における資本主義の発展の結果として起こった階級・階層の変化である。第1は、総人口に占める非生産的な階層の増大である。この階層には、流通業者、銀行業者、公務員、軍人、年金受給者などが含まれる。第2に、作業プロセスの機械化により、「生産知識層」と呼ばれる階層が発展したことだ。このことは支配階級を不要にする生産の科学的管理の可能性を示すが、その階層が支配的になることは意味

(67) M. Kitchen, *op., cit.*, p.67.

(68) Paul Sering (Richard Löwenthal), "Der Faschismus," in *Zeitschrift für Socialismus*, 24/25, September/Okttober 1935.

しない。その階層はブルジョワジーの地位を主張するが、経済的にはプロレタリア階級の上に位置し、非生産的階層とともに一つの階層を形成している。第3に、小生産者の経済的消耗が続いていることだ。第4に、生産部門による発展の違いにより、ブルジョワジーとプロレタリアートの間で利益の相対的連帯が作り出されていることだ<sup>(69)</sup>。

次にレーヴェンタールが目目するのは、完全に熟練した民主主義がもつ経済的・社会的意味である。封建性から解放された資本主義社会において、絶対主義と革命によって作られた国家は自由な個人にのみ相対し、人権と契約の自由を原則とする法制度がそれを永続化させる。しかし、個人の自由は類似性に従った組織化の解放であり、階級組織の発展は市民社会の基本的な傾向である。つまりレーヴェンタールにとって、市民社会とは階級組織の力のバランスの変化を自動的に調整する機制である。そしてそれを国家政治に連結するのが議会政治である。議会主義はもともと限定された利害関係者によって始められ、政党も支配階級内の家の伝統を通して始まったことは言うまでもない。普通選挙の結果、名望家政党は専門政治家とプロパガンダによって機能するパーティーマシーンへと変貌する。民主主義は実際のところ、大衆政党による議会政治として実現された。レーヴェンタールはこうした大衆政党の発展が同時に「利益政党」への移行であったこと、つまり実現された民主主義は「利益民主主義」であると主張する<sup>(70)</sup>。隻眼である。

帝国主義の時代、国家の経済的役割が決定的に増加し、国家の経済政策が個人の生活に直結するようになる。レーヴェンタールは、この時期に官僚制の範囲と権限が拡大して国家による社会への介入が急増するとともに、階級組織が国家政治をめぐる利益によって境界がしかれる利益政党に集約

---

(69) *Ibid.*, p.769.

(70) *Ibid.*, pp.773-776.

され、利益民主主義が完全なものになったとする<sup>(71)</sup>。政治は市民社会の競合的利益を代表する各利益政党の交渉と妥協の結果として生じるのであり、この枠組みを超えるものは秩序の攪乱とみなされる。レーヴェンタールのこの論理から、先進民主主義国でプロレタリア革命が起きなかった理由が説明できるだろう。労働者階級の利益がまがりなりにも代表される民主主義が実現している以上、国家はブルジョワジーの支配の道具であるという正統派マルクス主義の論理が目に見えるものにはなっていないし、秩序を壊してまで労働者階級の支配を勝ち取ることにあまり意味を見出せなかったからだ。しかし、この構造は、第一次世界大戦の後、大きく変わることになる。

第一次世界大戦以降、階級組織をめぐる国家構造が大きく変化した。それが先に述べた階級・階層の変化である。いくつもの境界線にそって社会が分断されたことにより、統一された組織構造が弱体化した。ブルジョワ階級にしても労働者階級にしても、階級組織に対する信頼が薄れ、それを基盤にした政党の交渉や妥協からなる議会政治は危機に陥る。政党システムは細分化されるほど、妥協が難しくなるからだ。もっとも急速に大衆の基底を失ったのはブルジョワ階級であり、彼らは国家に直接に圧力をかけて要求を通そうとする試みを一層激しくする。他方、労働者階級は、ブルジョワジーへの攻撃が経済危機を悪化させ、それによってこれまでの民主主義的秩序が破壊されるというジレンマに立たされ、動きがとれなくなる。さらにまた、急増した非生産的階層や生産停滞部門の人々は国家の補助金に依拠するので、国家の財政危機は彼らの生活水準低下を招き、不満を政治システムにおつけることになる。こうした不安定な状況は、国際的信用の崩壊によって世界貿易が縮小するなか、植民地などの帝国主義的選択肢をもたない国では、とくに深刻なものとなった。債務国の自給自足とナ

---

(71) *Ibid.*, pp.774-776.

シヨナリズムへの傾斜，そして強力な国家の要請はある種必然であった。国家は大衆がもっとも依存している瞬間に，経済民主主義国家であるという理由だけで失敗する。決定を下すことのできない利害関係者の集団になるからだ。利益民主主義が危機に陥ると，国家に依存している人々は民主主義国家の失敗への絶望から，国家権力を集中した独裁政権に駆り立てられるようになる。かくして強力な国家が辿る道は最終的には，利益民主主義を支えた議会主義を排除し，利益の独立した表現を保証する民主的権利を廃棄する独裁政権に至る。利益民主主義の危機における社会主義的設計が成功しなければ，上記の展開が起こる，とレーヴェンタールは述べる<sup>(72)</sup>。

ファシズムはこうした状況の中で生じた。レーヴェンタールはファシズムがもつ特性をいろいろとあげているが，それらのいくつかはこうした由来から説明がつくであろう。彼の論理をまとめてみる。まず誰がファシズムの担い手になったのかという点であるが，その運動の核になったのは，「利益民主主義」からもれる人々，つまり非生産的階層など階級組織のなかで利益を反映できなくなっている人々であるとされる。だが，こうした人々だけがファシスト党に結集したわけではない。どの階級にも現行体制に絶望した人は大勢存在し，そうした人々をすべて含めた大衆政党として出現した。だから，ファシズムの階級的基底として曖昧な「中間階層」という概念が使われることもあるが，実際にはすべての階級と結びついている。それゆえにそれは経済闘争の具体的な場をもたず，国家利益に集中してすべての階級に弾力性をもって対応することができた。こうした論理に基づいていたので，レーヴェンタールは「ファシスト党は本質的にブルジョワ階級の一部の利益を代表」し，「全体としてはブルジョワ運動として成長した」と認識しつつも，初期において社会主義的相貌も有していた

---

(72) *Ibid.*, pp.776-780.

と認めることができた<sup>(73)</sup>。

ファシズムの階級的性格に関する説明は、政治にも適用される。ファシスト運動のスローガンは、利益交渉の禁止、自由主義の終焉、世界経済からの国民経済の解放、共通利益の優先、債務の免除、物質主義に反対する理想主義、などである。こうしたアジテーションに一定の社会的立場に基づく具体的な内容はなく、ただ体制を告発するだけである。また、政治的支配階級に関しても、それを構成するのは議会や政党の民主主義的な伝統や慣習に囚われない人々、すなわち失業した軍人や失敗した知識人などの「根こぎにされた」人々であるとされた。こうした人々は大衆のイデオロギイの潮流のなかで、ブルジョワの利己的政治と党派的駆け引きをたえず告発できる立場におり、すばやくクーデターへの道を見出すことができたからだ。そこから国家装置をすべて押収した全体主義国家へは短い道のりだ。こうした立論の後、レーヴェンタールはファシズムの行っていることを「ファシスト革命」と呼ぶ。ファシズムはなぜ革命と言えるか。経済的構成に関してでないことは最初から明らかだ。彼はファシズムを、市民社会の民主主義的構造を破壊し尽くすという意味で革命的とする<sup>(74)</sup>。

経済発展に対応した階級構造の変化と、それと連動した利益民主主義的な国家政治の発展からファシズムの成立を解き明かすレーヴェンタールの議論は、透徹した論理構造と広範な射程をもっている。フェリーチェはマルクス主義者のファシズム解釈としては最高傑作であるとするが、首肯できるだろう<sup>(75)</sup>。だが、ファシズムの特性としてレーヴェンタールがあげているもののなかには、十分に説明できないものもある。一つは精神態度であり、民主主義のもとでの利益団体は成員の自発的な活動に依拠するのに対し、ファシスト党は指導者に身を委ねるといった成員の心構えに依拠す

(73) *Ibid.*, p.784.

(74) *Ibid.*, pp.784-787.

(75) フェリーチェ、前掲書、80頁。

るとされていることだ。もう一つは党が軍隊と同じ組織構造をとることだ。ファシスト党では、党組織と軍事的ユニットが階層的・中央集権的に構成されており、かつてない組織形態をとっていると説明されている。この2つの特性は、ファシズムの大衆政党としての存在理由が、日々の軍事的行動にのみあることから理解できよう。しかし、それは何に由来するのか。階級論から導き出すのは難しいと思われる。もっとも、19世紀終わり頃に近代的な大衆運動が出てきたときに使われた「根こぎにされた人々」という表現を使っていることなどからも、レーヴェンタールの理論が文化的問題まで射程を拡げる可能性をもつものであったことは確かである。

最後に、文化的問題に切り込んだダニエル・ゲランを取り上げたい。パリで生まれたダニエル・ゲランは、1920年代に革命的サンディカリストとして政治活動を始め、それ以降、反植民地運動などで反帝国主義・反ファシズムの闘争を積極的に押し進めたマルクス主義者である。1930年代にトロツキーと親しくなり、その影響を受けている。第二次世界大戦後はアナキストとして独自のマルクス主義理論を展開した。ここで取り上げるのは、1933年にナチス政権が成立した後にドイツに行き、そこで得られた知見に基づいて書かれた『ファシズムと大資本』である。1945年版と1965年版の2つの序文によると、それは1934年2月6日のパリ騒擾事件のすぐあと、シモヌ・ベイユらの友人からの勧めで、学識ある研究によってファシズムと闘うために書き始められ、1936年7月に公刊された。その意図は「ブルジョワ民主主義にすぎることではファシズムと闘えないのであり、だからファシズムと社会主義の間で選択しなければならない」と読者に確信させることにあった<sup>(76)</sup>。

ゲランにとって、ファシズムは「大資本に仕える道具」にすぎない。彼は大企業家、とりわけ重工業家はファシスト独裁の主たる、おそらくは唯

---

(76) Daniel Guérin, *Sur le fascisme II: fascism et grand capital*, François Maspero, 1965, pp.7-8, 15-23.

一の受益者だと言う。それに関しては、ドイツとイタリアを分析して、次のように結論づける。第一次世界大戦後、大企業は社会革命を押しとどめるために労働者階級に譲歩する必要があった。しかしある日、こうした譲歩を元に戻すことを決断し、武装し軍隊化したギャングに組織化されたプロレタリアートを急襲させ、それを粉砕する仕事を任せるという独自の考えに至った。かつて農民プロレタリアートを無制限に搾取していたが、戦後に土地を取り上げられた大土地所有者も、そのゲームに参加した。重工業家はさらに、軍需品の注文を渴望して、「不正な条約」に対する戦いを支援し、そのために合法的な政府に対する戦いをファシスト・ギャングに実行させた。とはいえ、大企業家はファシストに権力を獲得させようとはもともと考えていなかった。しかし、経済危機が深刻になり、強力な国家のみが企業利益を取り戻せると思われるようになると、大企業家は一步踏み出し、ファシストの軍隊に政治権力を征服させることを決意し、新しい独裁を打ち立てる方向に動いた<sup>(77)</sup>。

ここまでは正統派マルクス主義者と大差ないが、ゲランはトロツキーと同様に中間階級の役割を重視し、ファシスト軍隊の土台は都市の中間的諸階級であると指摘する。1848年の『共産党宣言』に書かれているように、中間階級、とくに小商人、商店主、手工業者、農民といった低中間階級は、資本主義の発展の結果としてプロレタリア化し、独立した階級ではなくなる運命にあると、社会主義者は考えてきた。しかし、ゲランは資本主義の一定の発展段階において、新しい中間階級が生み出されたとする。それは一方で、独立した中間階級とは異なって生産道具をもたないが、他方では、給与、報酬、手数料で生活しているものの本来の意味での賃金労働者ではないという、かつてない都市型の中間階級である。この階級の存在を最初に取り上げたのはカウツキーであり、それがプロレタリア化しないゆえに

---

(77) *Ibid.*, pp.18, 25-31.



革命が進まないことに焦点があったが、ゲランは戦争によってそれがプロレタリア化したことをファシズム台頭の最大の要因とみなす。彼がファシズムの大衆の基底としたのは、この階級以外に、独占資本によって追い詰められた独立生産者、企業の奴隷となった技術者、戦争によって窮乏化した古い中間階級などを含めた中間的諸階級である<sup>(78)</sup>。

それでは、ファシズムが大資本の道具であることと、その大衆的基底が中間的諸階級であることは、どのように結びついているのだろうか。それに関する論理はどこにも見つけることができない。ゲランが重点を置いて論じているのは、ファシズムの神秘主義である。それは何らかの絶対的なものと融合する宗教的経験のことであり、ゲランは、一方において、大衆のなかにそれを求める動きがあり、他方において、ファシズム支配者がそれを利用しようとしていることを明らかにする。前者については、「近代において人々が自然を支配する術をより知るようになり、日常的な重荷を軽くすることに成功するにつれ、宗教は衰退した」が、しかしそれで宗教の起源となる不安が解消されたわけではまったくなく、「資本主義の危機は、自然の荒れ狂う理解不能な力を前に遠い祖先が抱いたに違いないことに類似した悲嘆と狼狽のなかに、大衆を陥れる」と説明された。また後者については、「民衆と交わった経験から群衆の心理を知った」というムッソリーニの上院での演説は、彼が愛読していたル・ボンの『群衆の心理』のなかの「群衆はいかなる意見ももたず」、「単純で極端な感情のみを理解し」、「イメージのみによって動く」という記述に基づくと説明された。さらに、「ドイツを苦難から救い出すのは些細な事に拘る知性ではなく、あなたの信仰」であり、「あなたはここにいるのは、あなたの内なる声がそれを命じたからであり、あなたがわれわれの運動とその指導を信じているから」であって、「理性」によるものではない、というヒトラーの大衆

---

(78) *Ibid.*, pp.47-49.

に向けた演説を例証としてあげている<sup>(79)</sup>。

このようなゲランの説明は、文化論的なものだ。ゲラン自身もそれを意識してか、「ニヒリズム革命」を提示したヘルマン・ラウシュニングを批判し、大企業は褐色の潮流に飲み込まれたわけではなく、まったく逆に自立した支配者のままだと主張し、神秘論は同質ではない大衆を「一つに結びつけるセメント」の必要性から生まれたものだとする。つまり、それが時代の危機意識に飲まれた大衆を支配するのに一番適した手段だった、ということであろう。もっとも、それでもまだ、「大企業の支配」と「窮乏化したプチブルの神秘的動乱」という2つのテーゼの関係が明確になったわけではないであろう。このこととの関連で、デマゴギー的な神秘主義は後景に退き、今や支配するファシストの独裁的イデオロギーが前面に出てきているというゲランの指摘も疑問が残る。ゲランはファシズムのイデオロギーを、「無限の進歩」を唱えたブルジョワ・イデオロギーに対立する、「封建的・教権的・絶対主義的なアンシャン・レジームの反動哲学に姉妹のように似ている」と述べるが、それはブルジョワ支配とどのように関係するのか、神秘主義以上に分からないと思われる<sup>(80)</sup>。

## 5. おわりに

戦間期におけるマルクス主義者の中心にいたのはコミンテルンであり、そこでの決議が共産主義者のなかでは絶対的な力をもっていた。共産主義者はヨーロッパやアジアの各国で大きな勢力を有していたので、コミンテルンの発言力は絶大であった。したがって、そのファシズム論は共産主義者以外のマルクス主義者にも多大な影響を及ぼした。マルクス主義者の唯物史観からすれば、政治的闘争は階級対立から生じるものなので、ファ

(79) *Ibid.*, pp.72-73.

(80) *Ibid.*, pp.71, 167.

シズムが資本家の道具であるという点は揺るがせないものだった。スターリンの独裁以降はその点のみに集中した論理に単純化されたが、それまではコミンテルン指導層内部でも、そしてそれ以降でもコミンテルン指導層以外では多彩な理論の展開があった。戦後の独特な階級構造の変化に着目したバウアー、帝国主義経済が及ぼした中間階級の没落を説いたドップ、危機的状況において台頭する独裁政治の論理を剔抉したタールハイマー、利益民主政治の破綻が招く国家権力の集中を解き明かしたレーヴェンタール、都市型中間階級のプロレタリア化に注目したゲラン、どれも出色の論理を展開している。これらの論理の集約点をもし見つけるとすれば、それはプチブルジョワジーになるだろう。多彩な論理はなぜプチブルジョワジーがファシズムの基盤になったかをさまざまな角度から説明する。

しかし、ファシズムとは何かという問題そのものを説明することは難しい。資本家の道具という論理に制約されている限り、その独自性に迫ることは困難であろう。おそらくはそれを承知の上で説明を試みたマルクス主義者はいた。ラデックである。「新しい人間」や「新しい秩序」というファシズムの論理を見つけたことは特質に値する。「ファシスト革命」を論じたレーヴェンタールや「神秘的動乱」を論じたゲランは、ラデックと同じ方向に思考を進めた。この方法に進んだ時、最後に突き当たるのは文明の問題ではないだろうか。ファシズムの理論家のなかには、文明論的見地からヨーロッパを自由主義、共産主義、ファシズムの三つが覇を競う場と捉えていた者がいる<sup>(81)</sup>。ムッソリーニが作ろうとした国際ファシストもこうした見地に立っていたと思われる。ファシズムについて論じているわけではないものの、トロツキーの文明論や「共和政ヨーロッパ連邦」について言及したのは、ここに理由がある。この議論を推し進めていけば、ファシズムについて違う見方ができたかもしれない。

(81) 拙著『フランスにおけるファシズムの形成——プーランジスムからフェソーまで』岩波書店、1999年、353-371頁。